

小説の用例に見るモダリティ副詞と共起成分の変遷

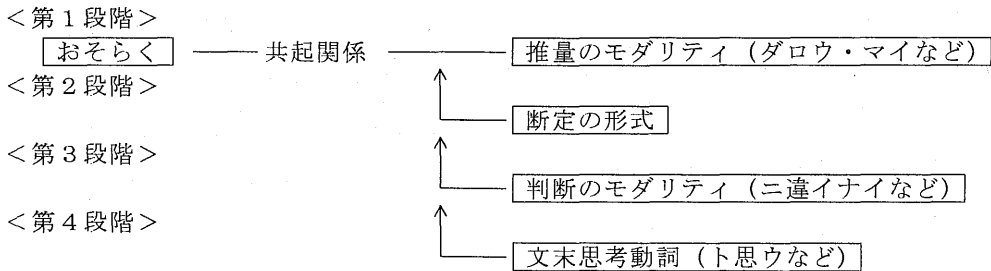
小池 康

キーワード：陳述副詞 共起 共起変化モデル 共起比率

1. 目的

筆者は、言語変化の一側面として、副詞および副詞と共起する成分（以下、共起成分と呼ぶ）の対応関係の変化を措定し、そのモデル化を目指している。そして筆者は、かつて小池(1997)において、いわゆる陳述副詞を中心に、その共起成分の明治期以降の史的变化について考察した。小池(1997)は、明治期から昭和期の小説に現われた副詞の用例を採取し、そのデータに基づき副詞の共起成分の変化を考察したものである。そして、副詞と共起成分の関係を「共起変化の図式」として提示し、図1のように副詞ごとに共起する成分に段階性が認められることを明らかにした。

図1 「おそらく」の共起変化



(小池(1997) p.77より引用)

図1は、「おそらく」と共起する成分が「推量のモダリティ」から漸次「断定の形式」や「判断のモダリティ」とも共起するようになっていくさまを表わしたものである。

本稿では、副詞一語ごとに焦点を当て分析を行なった小池(1997)を発展させ、さらに同一の共起成分に対して副詞間でどのような傾向が表われるのかをも考察する。

2. 対象語

本稿では、小池(1997)同様、推量のモダリティと共起するとされる副詞の中から、小池(1997)でも取り上げた「おそらく[*1]」「たぶん」に加え、「おおかた」「さぞ[*2]」「さだめし[*3]」「きっと」の計6語を対象語と設定する。これらの語は、推量のモダリティと共起した文が辞書等の用例において多く認められるものである。

3. 資料

研究の性格上、資料は発話資料・書記資料・アンケート資料など、多方面からの資料を踏まえた上での分析が必要となる。本稿では、このうち書記資料に基づいた分析を行なう。しかし、書記資料と言っても、それには文芸作品(小説・随筆・詩歌など)・論説文・新聞記事・日記・手紙をはじめ、その他にも実にさまざまなものが含まれる。そこで、本稿ではこのうち文芸作品、特に小説を資料として考察を進めていくことにする。また、時代的には、いわゆる近代以降の作品を対象とする。

資料は『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)、『CD-ROM版 明治の文豪』(1997)、『CD-ROM版 大正の文豪』(1997)より、日本人で東京生まれの作家23名の小説(解説等は除く)およびインターネット上で公開されている文芸作品のうち東京出身の作家4名の小説を使用した。

分析の対象を東京生まれの作家に限定したのは、特に明治・大正期の作家で地方出身者の場合、彼らの用いる日本語が出身地の方言の影響を受けている可能性があると考えられたためである。本稿は、副詞の共起における明治期から昭和期に至る変遷を見ようとするものなので、なるべく資料に均質性を持たせるために、東京生まれの作家に限定して分析した。なお、作者、作品等については付記にまとめた。

なお、上記の資料のみで小説の用例のすべてをうかがい知ることができるとは考えていない。むしろ少なきに失した感も否めない。その意味で、以下に述べる各副詞のモデル化および副詞間の変化の様相は断定的なものとはなっていないことをあらかじめお断わりしておきたい。本稿では、あくまでもモデル化への試行という位置づけで、これらの資料を用いたと理解していただきたい。

4. 分 析

4.1 辞書的な意味

まずは、各語の辞書的な意味を見ておきたいと思う。

各対象語の辞書的な意味[*4]は、いずれの語もある事柄が成立する可能性が高いであろうということを推量する意味を持ち、しばしば推量の表現を伴うという点で共通している。

以下、各対象語の特徴を挙げておく。まず、「おそらく」はややかたい文章語で、丁寧な文体で用いられることが多いとされ、これと対照的な用いられ方をするのが「たぶん」とであるとされる。「おおかた」は基本的には程度を表わす副詞であるが、その派生義として事柄が成立する可能性の高さを推量する意味にも用いられるようになった。「さぞ」と「さだめし」は、いずれも話者が現在推測できない事柄を推量するという意味で共通しているが、「さだめし」は「さぞ」に比べ書き言葉的もしくは古い表現であるとされている。

「きっと」は、主体の違いによって意味が変わる。主体が話者の場合には決意、主体が相手の場合には要望、主体が第三者や物の場合には推量に近い意味となる。

本稿では、各共起成分と共起する割合（以下「共起比率」）を見ることで、これらの意味の違いが、史的にどのような変遷をたどってきたかを見ることができると考える。

4.2 各対象語の共起変化モデル

本節では、検出された対象語の用例数一覧（表1から表6。なお、表中の点線での区分線についての説明は後述）を掲げ、それに基づき考察を加えていく。

「おそらく」（表1）は394例[*5]、「たぶん」（表2）は139例[*6]検出された。このうち、いわゆる認識的モダリティにおける推量（以下「推量のモダリティ」）の「（ダ）ロウ[*7]」と共起した例は、「おそらく」で191例（48.5%）、「たぶん」で72例（51.8%）と、半数近くを占めた。また、いわゆる断定のモダリティに相当すると考えられる「活用形」や「ダ」と共起した例も、作家の個人差は認められるにしろ、時代が下るにつれ見受けられるようになっていっているのも両対象語に共通の特徴であると言えよう。逆に相違点としては、「おそらく」ではいわゆる判断のモダリティに属する「ニ違イナイ」と多く共起していたり、「マイ[*8]」や「推量該当表現[*9]」「ノデハナイカ」など「（ダ）ロウ」以外の推量のモダリティとの共起も多く見られることが挙げられる。この後者の点については、「たぶん」が推量のモダリティとしては主に「（ダ）ロウ」という形式と共起している点

表1 「おそらく」の用例数[*10]

	明 治														大 正				昭 和						計	
	四 迷	紅 葉	歌 石	一 葉	有 島	実 施	谷 崎	長 与	かの子	芥 川	石 川	虫 太郎	堀	大 岡	中 島	池 袋	源 藤	三 島	足	北	吉 村	曾 野	塩 野	椎 名		沢 木
(ダ)ロウ	5	1	30		8	1	11	1	2	22	10	6	7	7	5	5	10	7	1	22	3	10	3	4	10	191
マ イ	3		3	2			2			5	1			1	1	1	1	1		1						22
推量該当表現			5							1	4	2								4	3	2				21
ヨウ(ダ)							1				2												1			4
ソウ(ダ)			1																							1
ラ シ イ												1								4						5
カモシレナイ					1		1						1				2									5
ノデハナイカ			2								2	4					1	1		2		1				11
ニ違イナイ							2			3		1	2				4	3	2	8		4			3	32
ハズ(ダ)																		1		2		1			2	5
ト思ウ										1				1		1		3		1		4	1			12
名 詞					1		1			5	4		1	1			1	3		4						21
活 用 形	1							1		2		3		2			1	13		10	1	1		1	2	38
ダ								1					1	2				6		3		2	1		5	21
一語文		1														1										1
計	9	7	36	2	10	1	18	3	2	39	23	17	12	14	6	8	20	38	3	61	7	26	5	5	22	394

で対照的である。

以上のことを踏まえ、両対象語の「共起変化の図式（以下、共起変化モデルとする）」を提示する（図2、図3）。

図2 「おそらく」の共起変化モデル

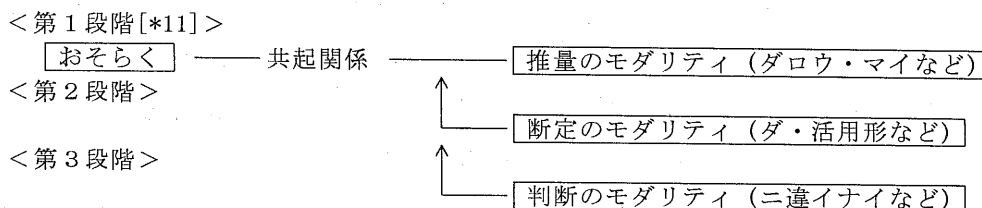


図2は図1を修正したものである。図2では、< 第4段階「文末思考動詞」>が削除された。これは、小池(1997)では、「ト思ウ」などのいわゆる文末思考動詞（森山1992）は、推量や判断のモダリティ形式が前接した場合を除き、そのままモダリティ形式としてカウ

ントした。しかし、断定の「ダ」に後接した場合の「ト思ウ」（たとえば「人違いだと思
 う」「金を隠しているのだと思う」など）は、モダリティ形式としてではなく、前接の断
 定のモダリティに準拠し、それをいわば補助するような機能を担うものとして考えられ、
 その意味で推量や判断のモダリティ形式が前接した場合と同様の機能を担っていると考
 えられる。このことより、本調査では具体的なモダリティ形式がない場合（たとえば用言の
 終止形など）に「ト思ウ」が付いた場合のみ推量のモダリティ用法としてカウントするこ
 とにした[*12]。その結果、「ト思ウ」に関してさほどの特徴が見いだせなかったため、今
 回のモデルでは削除した。

表2 「たぶん」の用例数

	明 治										大 正		昭 和			計		
	四 迷	漱 石	美 紗	谷 崎	長 与	かの子	芥 川	石 川	虫 太 郎	大 岡	中 島	遠 藤	三 島	北	曾 野		椎 名	沢 木
(ダ)ロウ	8	2	10	5	1	4	7	7	12		2			8		6	72	
マ イ	1													1			2	
推量語当表現					1	1	1										3	
ヨウ(ダ)														1			1	
ソウ(ダ)									1					1			2	
ラ シ イ			1				1			1		3					6	
カモシレナイ												1					1	
ノデハナイカ														1			1	
ニ違イナイ				1													1	
ナケレバナラナイ							1										1	
ハズ(ダ)														1		2	3	
ト 思 ウ				1										7			8	
名 詞												1					1	
活 用 形	1			2					1			3		4		2	13	
ダ					1								7	8	1	2	19	
一語文												1	1	2			4	
言いざし							1										1	
計	2	8	2	15	6	2	7	9	7	14	1	2	16	1	34	1	12	139

図3 「たぶん」の共起変化モデル

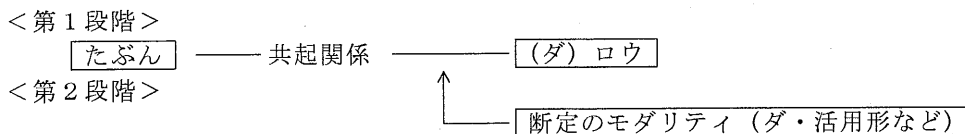


図3は、おおむね小池(1997)と構造的には違いはないが、<第1段階>の共起成分を「推量のモダリティ」から「(ダ)ロウ」に替えた。これは表2より、「たぶん」が推量のモダリティの各形式と幅広く共起しているわけではなく、むしろ「(ダ)ロウ」という特定のモダリティと共起しているためである。

表3 「おおかた」の用例数

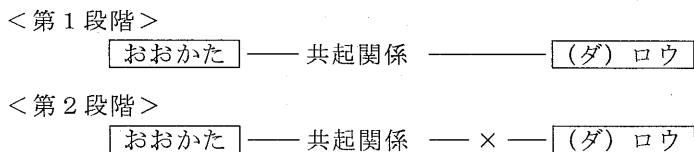
	明 治							計
	四 遠	紅 葉	漱 石	一 葉	谷 崎	芥 川	石 川	
(ダ)ロウ	15	3	44	2	9	24	2	99
マ イ	2		1					3
推量該当表現	2					2	1	5
ヨウ(ダ)	1							1
カモシレナイ	1							1
ノデハナイカ	1							1
ニ違イナイ	1		1					2
ト 思 う	2							2
名 詞				2				2
活 用 形		1		1				2
ダ	3		4		1			8
言いさし	1							1
計	29	4	50	5	10	26	3	127

次に、「おおかた」(表3) [*13]を見る。

共起成分を見ると、明治期の石川淳までは「(ダ)ロウ」と共起していた用例が検出できたが、小栗虫太郎以降では用例は検出できなかった。これは、程度量の副詞として定着していったために、推量の用法では用いられなくなったのではないかと考えられる。

共起変化のモデルとしては、図4のようになろう。

図4 「おおかた」の共起変化モデル



次に、「さぞ」と「さだめし」を取り上げる。

表4 「さぞ」の用例数

	明治											大正			昭和		計		
	四速	紅葉	漱石	美妙	騎堂	一葉	有島	実施	兵与	かの子	芥川	虫太郎	大岡	池波	遠藤	星		北	曾野
(ダ)ロウ	26	22	32	2	1	8	13	2	2	3	8	1	1	1	1	2	1	4	130
マイ	1																		1
推薦該当表現		2				1													3
ラシイ		1																	1
カモンレナイ																			
活用形		2				1													3
言いさし	1	1	1																3
計	28	28	33	2	1	10	13	2	2	3	8	1	1	1	1	2	1	4	141

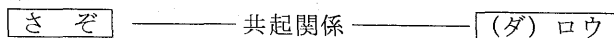
表5 「さだめし」の用例数

	明治							大正			昭和	計
	四速	紅葉	漱石	一葉	谷崎	芥川	石川	虫太郎	池波	遠藤	曾野	
(ダ)ロウ	7	1	29	7	1		2	1	1		2	51
マイ						1						1
推薦該当表現		2		2								4
ヨウ(ダ)	1			1								2
ニ違イナイ				1	1							2
ト思ウ		1									1	2
活用形				1								1
ダ							1		1			2
言いさし							2					2
計	8	4	29	12	2	1	5	1	1	1	3	67

表4の「さぞ」[*14]は、全体の用例数自体はさほど多くはないが、昭和期生まれの曾野綾子まで用例は検出できた。共起成分では、141例中130例が「(ダ)ロウ」と共起し、有島武郎以降では、検出例はすべて「(ダ)ロウ」との共起であった。このことより、「さぞ」と「(ダ)ロウ」の結びつきはかなり強固なものになっていると考えられる。それゆえ、「さぞ」の共起変化モデルは図5のように書けよう。

図5 「さぞ」の共起変化モデル

<第1段階>



一方、辞書的には「さぞ」と類義として扱われている「さだめし」(表5) [*15]である

が、今回の調査の中でもっとも検出用例数が少なかった。共起する成分も「(ダ)ロウ」が主流であるとは言えようが、あまり傾向のようなものは見受けられない。それゆえ、「さだめし」の共起変化モデルは提示しない。「さだめし」も、「おおかた」同様、推量の副詞としては用いられなくなってきたと考えられる。

次に「きっと」であるが、この副詞は、主語の人称によって意味の使い分けがなされるので、一概に推量のモダリティと共起するとは言えない。表6[*16]でも、「(ダ)ロウ」の他に「活用形」や「ダ」、または「ニ違イナイ」など共起成分は多彩である。さらに、それらの用例は明治初期から現代に至るまで比較的安定して検出された。「きっと」は推量からかなり強い断定の意味を担った副詞であると言われるが、共起成分の史的分布を見てもそのことをうかがい知ることができる。「きっと」の共起変化モデルは図6のようになろう。

表6 「きっと」の用例数

	明 治													大 正				昭 和				計		
	四 速	紅 葉	秋 石	一 葉	有 島	茨 鷲	谷 崎	長 与	かの子	芥 川	石 川	虫 次郎	堀	大 岡	中 島	池 波	遠 藤	三 島	星	北	曾 野		権 名	沢 木
(ダ)ロウ		2	12		6	5	6	3		14	1	3	1			2	2	1	2	6	2	3	11	82
マ イ																				1				1
推量該当表耳			1								1													2
ヨウ(ダ)	2																							2
カモンレナイ					1	1	1	1				1								1				6
ノデハナイカ											1										1			2
ニ違イナイ	9	2	8		7	1	3			7	1					3		2	4	2			5	54
ニ決マッテイル			6		1	1					1								2					11
ナケレバナラナイ			1																					1
ハズ(ダ)										3	1												1	5
ツモリダ			2																					2
ト 思 う			2		2	3				1	1					1					4	1	3	18
名 詞																							1	1
活 用 形	25	25	62	4	29	2	14	2	1	14	5	1		3	1		2		21	2			22	235
ダ	2	4	11	1	4		7	6		2	1	1	1	1			1		7	3	2		6	60
一語文	2	5	4		5		4	2						1					1	3			8	35
言いさし	1										1			1										3
その他	1		1							3										1				6
判断不可							1				1													2
計	42	38	110	5	55	13	36	14	1	44	8	12	3	3	3	3	6	4	4	44	17	6	57	528

図6 「きっと」の共起変化モデル

<第1段階>

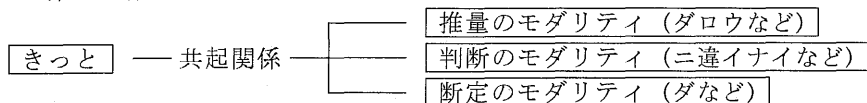


図6は、「きっと」が同一の段階で三つのモダリティと共起していることを示している。

4.3 副詞間の共起の変遷の分析

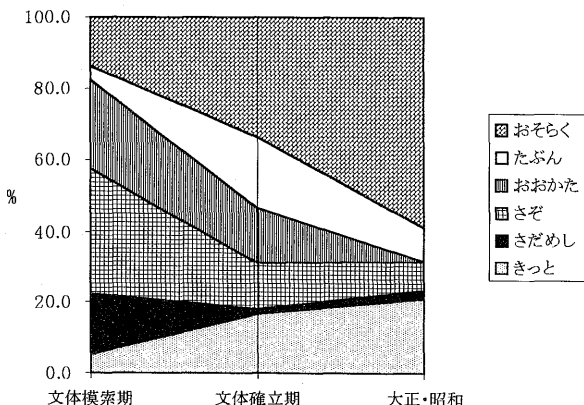
さて、前節までは各対象語ごとの共起成分に対する考察であったが、同一の共起成分が各副詞とどのような比率で共起しているのかを見ることで、副詞間での共起成分に対する史の変遷が明らかになるものと思われる。そこで本節では、特に推量の共起成分の代表格として「(ダ)ロウ」を、判断の共起成分の代表格として「ニ違イナイ」を、断定の共起表現の代表格として「ダ」を取り上げ、この三形式に焦点を当てて検証してみる。

図7は、「(ダ)ロウ」と共起した副詞の割合を、時期別に面グラフで示したものである。面グラフは、各対象語の共起率の変動がより視覚的に把握しやすいので、大局的な流れを見る上では優れていると思われる。

「文体模索期」「文体確立期」とは山本(1977)の論述を参考に、明治期の作家を分類したものである。文体模索期に含まれる作家は、明治初期、小説を書くにあたっての文体が

まだ確立されていない時期の作家で、樋口一葉まで含む。文体確立期に含まれる作家は、「小説上の近代口語文体を確立した」(山本1977)有島武郎や武者小路実篤などの白樺派以降の作家で、有島武郎から中島敦までを含む。4.2の表1から表6での点線は、文体模索期と文体確立期の境界を示している。なお、芥川龍之介などの作品には雅俗折衷体の作品も存在するが、二葉亭四迷や尾崎紅葉のよう

図7 「(ダ)ロウ」と共起する副詞の比率の変動



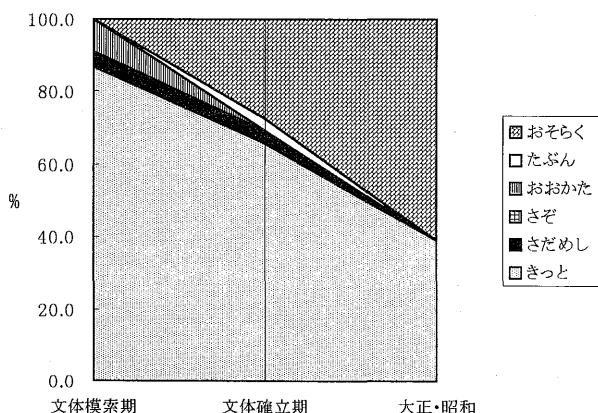
に小説の文体を確立するために文体の模索をしていたのとは趣が異なるため、文体確立期に含めた。

また、大正期と昭和期を分けると該当する作家数が少なくなるので、本稿ではまとめて分析対象とすることにした。結果、各期における該当作家数は、文体模索期6名、文体確立期11名、大正・昭和期10名となった。

以上のように、三つの時期に区分することによって、より詳細に時期別の特徴をうかがい知ることができるものと考えられる。

次に、グラフの数値の算出法について説明を加えておく。上述の三期ごとに全対象語の「(ダ)ロウ」と共起した用例数の総和を出し、各対象語ごとの「(ダ)ロウ」と共起した用例数でそれを割った値である。たとえば、図7の「文体模索期」に即して言えば、36（「おそらく」における文体模索期の「(ダ)ロウ」と共起した用例数の和、以下同）+10（たぶん）+64（おおかた）+91（さぞ）+44（さだめし）+14（きっと）の総和は259となり、次に各副詞での用例数でこの総和を割っていくと、「おそらく」； $36/259=13.9$ 、「たぶん」； $10/259=3.9$ 、以下「おおかた」；24.7、「さぞ」；35.1、「さだめし」；17.0、「きっと」；5.4という値が出る。この値は、そのまま「(ダ)ロウ」と共起した副詞の割合を示しており、当該の時期において「(ダ)ロウ」はどのような副詞と多く共起していたかがわかるようになっている。この算出法は、以下の図8、図9においても同じである。

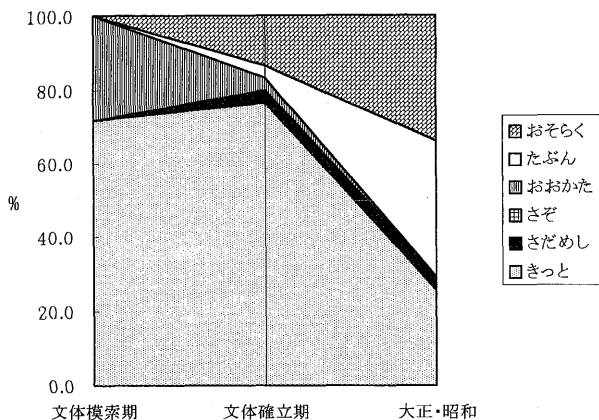
図8 「ニ違イナイ」と共起する副詞の比率の変動



さて図7を見ると、副詞ごとに「(ダ)ロウ」と共起する割合に特徴が認められる。特に、「おそらく」と「きっと」は時代が下るに従い「(ダ)ロウ」と共起する率が増加しているのに対し、逆に文体模索期で高い比率を占めていた「さぞ」や「おおかた」は、時代が下るに従い、共起率が減少したり、消失したりしている。

図8の「ニ違イナイ」の共起比率、および図9「ダ」の共起比

図9 「ダ」と共起する副詞の比率の変動



率を見ても、「おそらく」の共起比率の増加は顕著である。

一方、図7の場合と異なり、「きっと」の共起比率は低下しているのが目立つ。特に、大正・昭和期における比率の落ち込みは顕著である。また、図9における「たぶん」と「おおかた」の共起比率も対照的である。

以上の図7から図9までの結果より、特に目立った傾向について

述べておこう。

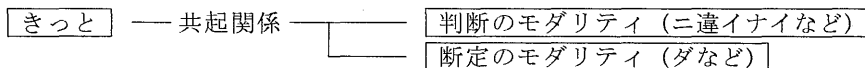
「おそらく」は時代が下るにつれて推量の共起成分「(ダ)ロウ」、判断の共起成分「ニ違イナイ」、断定の共起成分「ダ」のいずれとも共起比率が高くなっており、「おそらく」がさまざまな成分と共起するようになったことがわかる。その意味で、本稿の対象語中で、明治以降もっとも共起成分の変化に富んだ副詞であると言えることができるであろう。

「きっと」は、明治期ではどちらかというとな断定的・判断的な成分と共起してきたが、大正・昭和期以降では推量的な成分との共起が増加する傾向が見られる。これは、「おそらく」とは対照的に、共起成分の入れ替わりという現象も想定できる。

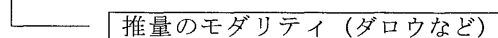
なお、図7から図9の結果より、図6の「きっと」の共起変化モデルは、図10のような修正を加えたほうがよいと思われる。このような修正は、図7と図8・図9の比較より、同一段階で三つのモダリティと共起していたと見るよりも、「推量のモダリティ」はやや遅れて共起成分となり始めたと考えの方が結果と合致するためである。

図10 「きっと」の共起変化モデル

<第1段階>



<第2段階>



「たぶん」は、辞書的な記述においては、「(ダ)ロウ」と共起しやすいと思われたが、今回の結果より、「(ダ)ロウ」とは主に文体確立期において多数を占めたが、大正・昭和期になるとむしろ断定の「ダ」との共起比率が高くなっており、「きっと」と同様、共起成分の入れ替わり現象が起こった可能性が想定できる。また、本稿では紙幅の都合上、文体差に伴う比較・分析は行なわなかったが、筆者の元にあるデータを見る限り、地の文とセリフ文において、副詞の出現の度合に差が認められる。特に、この「たぶん」などは、図7から図9までの分布とはまた違った様相を呈する可能性が考えられる。

5. まとめ

共起成分との共起比率を見ることで、各対象語の史的变化の様相がわかった。

「おそらく」はさまざまな成分と共起するようになった反面、「たぶん」や「きっと」では共起成分の入れ替わり現象とも呼べるような傾向が見受けられる。これに対して、「さぞ」は、「(ダ)ロウ」というモダリティ形式とのみ共起するという、まさしく「呼応」と呼べるような傾向が見られる。この意味で、「おそらく」「たぶん」「きっと」は漸次新たな共起成分を取ってきたのに対し、「さぞ」は共起成分が固定しているという点で、対照的な副詞であると言えよう。

また、「おおかた」や「さだめし」は、推量の副詞としてはほとんど使われなくなっており、「おそらく」などの他の推量の副詞との競合関係において、消失する運命にあるのかも知れない。これも、「おそらく」や「さぞ」などとは異なった、一つの変化の形と言えるであろう。

本稿は、3章でも述べたように、非常に制約された資料内での分析であり、またその結果も断言できるほどの強制力は持っていない。しかし、今後の言語変化のモデル化を進める上で、多少の指針ともなりうべき傾向らしきものがあるらしいということも完全に否定されるものでもないと思う。今後、より幅広く、また文学史的な背景も視野に入れた言語資料を基に、研究を進めていきたいと考えている。

注

*1 「おそらくは」も含む。

*2 「さぞや」「さぞかし」も含む。

- *3 「さだめて」も含む。
- *4 本稿で参照した辞書類は、島本(1989)、飛田・浅田(1994)、森田(1989)、および『使い方の分かる類語例解辞典』(1994)である。
- *5 「おそらく」「オソラク」「恐(ら)く」を検索した。『日本国語大辞典』に「蓋く」の表記例が見られたので併せて検索したが、用例は見られなかった。
- *6 「たぶん」「タブン」「多分」「他分」「多ぶん」を検索した。「多分に」は程度を表わす副詞であるため除外した。
- *7 「(ダ)ロウ」には、「ロウ・ダロウ・デアロウ・デショウ・マショウ」が含まれる。
- *8 「マイ」には否定推量と否定意志の意味があるが、本調査では否定推量のみを対象とした。
- *9 「推量該当表現」とは、「か(と思う・思われる)」「もの(と思う・思われる)」などの表現である。
- (1) おそらく大酒のせい**か**ある日脳溢血であっけなく死んでしまった。(石川)
- (2) 日本語になおすと、恐らく、以下のような文章になる**か**と思われた。(曾野)
- (3) おそらく大して実のあることを語らなかつた**もの**と思われる。(三島)
- (4) おそらく爆発の原因は、空弾の取扱いをあやまつた**もの**と想像された。(吉村)
- この場合の「か」は、安達(1995)にいう「疑問の埋め込み節を導く用法」に該当するものもあるが(例文1)、このような疑問(もしくは不確かさ)の表明も、何かを推量推測するのと類同関係にあると考えて「推量該当表現」に含めた。
- また、尾崎紅葉や樋口一葉などの雅俗折衷体(擬古文体)派の作家より検出された「べし」や「む」などもここに含めた。
- *10 表1および表2は、小池(1997)の表1、表2の数値と異なっているが、これは小池(1997)で検索した作品との異同等に起因するものである。
- *11 各副詞の共起変化モデルにおける<第1段階>などの「段階」は、統一した特定の時期を設定しておらず、あくまでも相対的なものである。特に、<第2段階>以降は、各副詞によって変わる。であるから、たとえば「おそらく」における<第2段階>と「たぶん」における<第2段階>は、同時期に発生したものではないことに、留意していただきたい。これらの統一的な記述に関しては、今後の課題である。
- *12 用言の活用形自体は、意味的・モダリティ的には断定を表わしていると考えられるが、無標のモダリティ形式ということで、ここでは「ダ」と分けた。この点に関してはさらなる考察を要すると思われる。
- *13 「おおかた」「おほかた」「オオカタ」「オホカタ」「大方」「大かた」を検索した。
- *14 「さぞ」「サゾ」「嚙」を検索した。
- *15 「さだめ」「サダメ」「定め」を検索した。
- *16 「きつ(つ)と」「キツ(ツ)ト」「きつと」「屹度」「急度」「必と」「必定」「必然」を検索した。

付記一作家・生年・使用作品一

CD-ROM

- ・二葉亭四迷(1862): 『平凡』『浮雲』『其面影』
- ・堀辰雄(1904): 『風立ちぬ』『美しい村』
- ・尾崎紅葉(1867): 『金色夜叉』
- ・大岡昇平(1909): 『野火』

- ・夏目漱石(1867)：『吾輩は猫である』『坊っちゃん』
『三四郎』『彼岸過迄』『こころ』
- ・樋口一葉(1872)：『にごりえ・たけくらべ』
- ・有島武郎(1878)：『或る女』
『小さき者へ・生まれ出づる悩み』
- ・武者小路実篤(1885)：『友情』
- ・谷崎潤一郎(1886)：『痴人の愛』
- ・長与善郎(1888)：『青銅の基督』
- ・芥川龍之介(1892)：『羅生門・鼻』『地獄変・偷盗』
『蜘蛛の糸・杜子春』『奉教人の死』『河童・或阿
呆の一生』
- ・石川 淳(1899)：『焼跡のイエス』
- ・中島 敦(1909)：『李陵・山月記』
- ・池波正太郎(1923)：『剣客商売』
- ・遠藤周作(1923)：『沈黙』
- ・三島由紀夫(1925)：『金閣寺』
- ・星 新一(1926)：『人民は弱し官吏は強し』
- ・北 杜夫(1927)：『楡家の人々』
- ・吉村 昭(1927)：『戦艦武蔵』
- ・曾野綾子(1931)：『太郎物語』
- ・塩野七生(1937)：『コンスタンティノープ
ルの陥落』
- ・椎名 誠(1944)：『新橋鳥森口青春篇』
- ・沢木耕太郎(1947)：『一瞬の夏』

インターネット（青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp>）

- ・山田美妙(1868)『武蔵野』
- ・岡本綺堂(1872)『修禅寺物語』
- ・有島武郎(上出)『卑怯者』『火事とボチ』『一房の葡萄』『溺れかけた兄妹』
- ・岡本かの子(1889)『みちのく』『狂童女の恋』『鯉魚』『東海道五十三次』『富士』『老妓抄』『鯨』
- ・小栗虫太郎(1901)『人外魔境』『失楽園殺人事件』『白蟻』
- ・中島 敦(上出)『悟浄歎異』『狐憑』『南島譚・幸福』『文字禍』『セトナ皇子』『巡査の居る風景』
『妖気録』

参考文献

- 『使い方の分かる類語例解辞典』(1994)、小学館
- 安達太郎(1995)「ノカとカラカ、タメカ、セイカ、テカ」『日本語類義表現の文法(下)』、くろしお出版
- 小池 康(1997)「副詞の共起変化の一考察—モダリティ副詞と共起する副詞を中心に—」『筑波応用言語学研究』4
- 島本基編(1989)『日本語学習者のための副詞用例辞典』、凡人社
- 中右 実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と』、くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版
- 三宅知宏(1994)「認知的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』11-8
- 山本正秀(1977)「言文一致体」『岩波講座 日本語10 文体』、岩波書店